

早稲田方面の話

元エヌ・イー ケムキャット 飯田逸夫

シニア懇談会の幽霊会員も多少の責めはあるらしく、その責めを塞ぐべく前回は牛込天神町交差点から東側へ向かう神楽坂について書いたので、今回は早稲田通りを早稲田側に進んだら何があるかを書くことにする。

そもそも新宿区とは牛込区、四谷区、淀橋区が合併して昭和 22 年(1947)にできたもので、そのうち牛込区は神楽坂、早稲田、市谷などの部分からなっている。

牛込天神町交差点から西側へすすむ道は次の写真の如くで、なんということもない町並みである。



1. 漱石公園

この道を進めばすぐに外苑東通りとぶつかる。この道を横断後に左折し、外苑東通り沿いに 60-70 m 南にいくと、右に入る細い道がある。これが漱石山房通りで、漱石公園、

漱石山房記念館がある。漱石山房とは夏目漱石の終の棲家のことである。

自分が子供の頃は、この漱石山房跡地に碌なものはなく、漱石邸の跡地と称するさえない空き地があり、猫塚だけが記憶に残っている。

その後自分は訪れることもなかったが、昭和 51 年(1976)に新宿区がこの地に公園を作り、続いて平成 20 年(2008)にこれを新しく改装し、平成 29 年(2017)に至って漱石山房記念館ができたとのこと。

まず下の写真のように「漱石公園」の表示があり、



この碑の左側には漱石山房記念館、右奥に下に示した写真のような漱石の胸像がある。この胸像の右後ろの柵の先に漱石公園がある。



公園の中（漱石山房記念館の裏側にあたる）に次の写真のような猫塚がある。

昔、自分は、この塚は漱石の「吾輩は猫である」のモデルの猫の墓と思い込んでいた。しかし猫塚の脇にある説明によれば、これは実は大正 10 年(1921)に漱石家にいた初代猫の 13 回忌に遺族が建てたものだそうで、しかもそれも震災や戦争で損傷してしまい、新宿区が昭和 28 年(1953)に修復再建したものとのことである。

何のことはない子供の頃に見たのは修復して間もない頃の猫塚だったことになる。



表にまわれば、漱石山房記念館がある。中に

は夏目漱石その人、および漱石の文学に関する展示があり、かつての漱石山房の部屋再現などが見られる。またブックカフェがありコーヒーなど飲みながら本も読める。



2. 喜久井町（漱石生誕の地）

漱石公園は早稲田南町に存在するが、その隣に喜久井町と呼ばれる地域がある。漱石はこの喜久井町で生まれている。

この名前の由来は、漱石の「硝子戸の中」に、漱石の父が明治の時代になって自分の家の家紋（井桁に菊）から採った町名をつけたのだと聞いた、と書いてある。さらに夏目家から南に行く時に通らなければならない坂道を、夏目坂となづけた。不幸にして夏目坂は喜久井町ほど有名にならず、只の坂として残っている、という内容の事を書いている。しかし今は決してそうではない。写真にあるように、立派に夏目坂通りとして通用している。



上の写真の位置から少し坂を上った夏目漱石誕生之地という記念碑がある。ただし、今は漱石の生まれた建屋はなく、家の跡地というものもなく、誕生記念碑のみで、うっかりすると見逃してしまう。



3. 堀部安兵衛

赤穂の四十七士の中で堀部安兵衛はかなり有名な人であろう。もともとは越後新発田（新潟県新発田市）の人で姓は中山であった。

安兵衛は、父が浪人し、その後死亡して、江戸に出て、当時名高い堀内源左衛門の道場に学んだ。安兵衛はこの道場で相当な使い手とした有名であったという。

一方安兵衛が江戸にでて来た時の保護者の一人であったらしい菅野六郎左衛門という者がいた。菅野も堀内道場の門弟であり菅野と安兵衛は義理の叔姪（菅野が叔父、安兵衛が甥）の間柄となった。この菅野六郎左衛門が同じ藩中の村上庄左衛門という者から果たし合いを申し込まれた。菅野は相手の村上庄左衛門が人数を集めているにもかかわらず、自分は若党と草履取りしか集められないと言って、安兵衛に助太刀を求めた。そして安兵衛は果たし合いの場である、高田馬場に出かけることになる。

随分前置きが長くなったが、彼が高田馬場に行く途中にある酒屋で一杯飲んだという話がある。それが小倉屋（こくらや）という酒屋で夏目坂が早稲田通りとぶつかるころにある。昔は安兵衛酒屋と呼ばれていたと記憶する。



上の写真がそれで、右へ行く道は夏目坂、左に写っているのは早稲田通りである。

店内にその時に安兵衛が使ったと称する櫛の写がある。昔は古い木造の建屋だったが、今はモダンになり、ワインなども扱っており、店先で立ち飲みをするような雰囲気ではない。

果たし合いの場所である高田馬場は、今のJR高田馬場駅付近まで行く必要はなく、西早稲田にあり、この酒屋から少し歩けば行けるところにある。文字通り馬場で、西早稲田三丁目、1、2、12、14を含む長方形の土地で旗本の武士たちが馬術の稽古をするところであった。今は馬場などはなく、新宿区教育委員会が出した「旧跡 高田馬場」のプレートがあるのみである。

なお、この果たし合いは評判になって、これを聞いた赤穂藩の堀部弥兵衛がつてを求めて安兵衛に近づき、養子になってくれなかと頼んだそうである。それで彼は中山姓から堀部姓になっている。

なお講談などでは、高田馬場の果たし合いの時、安兵衛は櫛がなかったが、丁度そこに来合わせた堀部弥兵衛の娘がしごきを櫛用に貸した。それが縁結びだったという話がでてくる。



では馬場の中のどの辺で斬り合ったのかであるが、このプレートの記述によれば、茶屋町通りとのことである。しかしそこも今や只の路地で茶屋町通りという柱が建っているのみである。



この時、菅野六郎左衛門は重傷を負いその結果死亡して、安兵衛が菅野の代わりに菅野の主人家、伊予西条の松平家に報告を出している。

この果たし合いで相手方は村上庄左衛門と弟二人および家来五人の合計八人来たそうで、安兵衛はこの内三人を斬っている。

この近所に水稻荷神社があり、そこに「堀部武庸加功績跡碑」があるが、それは大正3年(1913)に建てられたものである。漢文でぎっしり書いてあるが良く見えない。良く見えても理解できないのかもしれないが…



4. 穴八幡宮

夏目坂から早稲田通りを高田馬場方向にすこし進むと穴八幡宮がある。穴八幡への入口はいくつかあるが、下の写真の鳥居から行くと、本殿めがけてまっすぐ長い石段を登ることになる。



この八幡宮の起源については源義家が奥州からの凱旋の時、この地に八幡様を祭り、兜と太刀を納めたという伝承がある。

徳川幕府の八代将軍吉宗が世嗣の疱瘡の平癒祈願のためこの八幡宮に流鏝馬を奉納した。流鏝馬は高田馬場で実施されたようだ。その後この催しは中断した時期もあったが、続き、現在は近くの戸山公園で行われている。

さて社殿は次に示す写真のとおりである。この八幡宮では、冬至から翌年の節分までの間に「一陽来復」のお札が頂けて、これを恵方の高いところにお祭りすると金繰りがよくなるという話で結構人気がある。社殿の写真は2月1日に撮影したもので正面は込んでいるようには見えないが、左側からお札を頂いた人が次から次に入ってきて大層賑わっていた。



5. 山鹿素行

山鹿素行が現在どの程度有名なのかよくわからない。

昔の人なら彼が軍学の先生で赤穂で教え、大石内蔵助が吉良邸に討ち入った時に山鹿流の陣太鼓を打った、という話は御承知と思う。もっともこれは講談や浪花節の話で、本当は陣太鼓は叩いていなかったらしい。山鹿素行は小畑勘兵衛およびその高弟の北条氏長から甲州流軍学を学んでいる。しか

し軍学だけの人ではなく、林羅山のもとで朱子学も学んでいる。

浅野内匠頭の祖父長直は学問好きで山鹿素行に弟子入りしたが、その後素行を赤穂に千石で招聘している。素行はそこで九年教えたのち、一旦江戸にもどった。江戸では門人が大層集まったそうである。しかしその後素行は朱子学に疑問を抱くようになり、それがもとで幕府に江戸を追われ、赤穂に貶謫されることになる。山鹿素行はまたしても赤穂に行った訳である。今度は十年過ぎ、後に赦免されて江戸にもどった。この間に浅野内匠頭長矩、およびその弟大学長広、さらに大石内蔵助も素行に学んでいる。その山鹿素行の墓は漱石山房記念館からほど近い宗参寺にある。山鹿素行の墓は下の写真のようなものである。



月海院殿瑚光珊居士墓と刻まれている。傍に立派な梅の木がある。これは日露戦争時の将軍、乃木希典大将が山鹿素行を大層尊敬していて、彼の愛していた梅をここに移

し植えたものである。



7. 関孝和

和算の大家、関孝和は今でも有名人であろう。小学校の頃、校長先生のお話の中で、この近所に関孝和という偉い人のお墓がある、と朝礼で聞いてふーんと思っただけで、その後探しもしなかった。随分経ってから子供の散歩の次いでに探し当てた。

漱石山房記念館に対し外苑東通りを隔てた反対側の浄輪寺にある。



1708年に亡くなった関孝和がどれほどの天才だったかはなかなか素人では理解し難い。

あの時代に筆算による代数の計算法を開発

し、行列式概念を提案し、ベルヌーイ数をヤコブ・ベルヌーイより早く見出し、円周率をエイトケンの Δ^2 加速法（収束する数列を別の数列に置き換えて極値を早く求める。）で計算し、さらに関数の導関数にあたる物を計算し、積分の計算をする等々あり、算聖と呼ばれたのも尤なことである。

さりながら今考えると小学生に関孝和の大才を理解するのはそもそも無理であろう。